

佐藤美紀さん（経験年数：3年）



子どももお母さんも
自分も笑顔になれる。

一度は諦めた夢を
子育てを終えた今、実現

「この仕事を始めて生活が大きく変わりました。毎日が楽しくて仕方ないですね。ひまわりのような笑顔でそう話すのは、志布志市ファミリーサポートセンター・提供会員の佐藤美紀さんです。佐藤さんは元々子ども好きでしたが、学生時代に幼児教育を専攻したいという夢を諦めた過去がありました。そんな佐藤さんが長く過ごした神奈川を離れ、ご夫婦の故郷である志布志にUターンしたのは10年前のこと。ほどなくして、地域の犯罪予防活動や犯罪を犯した人の再犯防止のための更生支援活動を行うボランティア団体「更生保護女性会」で活動を始めました。「活動を通して少年犯罪には子どもの頃の体験が強い影響を与えていることを実感しました。子どもにとって母親が笑顔でいることが何よりも大切なんです」と佐藤さんは話します。女性会の活動と併行して、スーパーでセミナーが開催される際の子どもの一時的預かりのパートを始めた佐藤さんは、ファミリーサポートセンターの募集を目にしてすぐに応募しました。現在は志布志子育て支援センター「はぐくみランド」で子どもを預かったり、依頼会員の子どもを保育所の送迎をしたりしています。自分の予定に合わせてお手伝いできるファミリーサポートセンターのシステムは、とても活動しやすいそう。預かる時間は1.2時間～半日ほど。「わずかな時間ではありますが、泣いていた子が懐いてくれると愛おしく幸せな気持ちになります。同時に「私が守らなければ」という責任も感じますね」と佐藤さん。預かっている間にケガをしないよう、細心の注意を払うのはもちろんのこと、突然の病気やケガにも対応できるように救急隊や小児科などのセミナーも積極的に受講しています。

泣いているママがいたら
飛んでいきたい

童謡を聞いたり今流行っているアニメを見たりするようになって、刺激的な毎日を送る佐藤さん。仕事はご自身の家庭にもいい影響をもたらしました。「主人が楽しく過ごしているのがうれしみたいで、家庭が明るくなった感じがするんです。やっぱり家庭円満には女性の笑顔が必要なんですよね（笑）」と話すように、確かに佐藤さんには周囲の人の気持ちも明るくさせるような幸せなオーラがあります。「私が育児をしていた時代は皆で助け合って子育てしていましたが、今は共働きだったり核家族だったりして、ママが孤立化しやすいですね。だから私は泣いているママがいたら飛んで行って『少し休んでもいいんだよ』って言ってあげたいんです」と佐藤さんは言います。その根底にあるのは「子どもが好き」という想い。地域の子どもたちが幸せにすくすくと成長できるよう、佐藤さんはこれからも提供会員として、子どもたちとそのお母さんの笑顔を引き出すサポートを続けていきます。

取材先

志布志子育て支援センター「はぐくみランド」
〒899-7103 志布志市志布志町志布志 3-26-1 TEL 099-472-8993



木場あゆみさん（経験年数：7年）



悩めるママを
“孤育て”から救いたい。

資格と自らの経験を活かし
利用者からスタッフへ。

垂水市の子育て支援センターで働く木場あゆみさんは4児の母。週に4～5日、就学前の下の子どもたちと共に出勤し、子どもを遊ばせながら働ける今の環境をとっても気に入っているそうです。快活な笑顔が印象的な木場さんですが、初めての育児は苦労の連続でした。結婚を機に幼稚園教諭を辞め、縁もゆかりもない垂水市に引っ越し出産。育児に思い悩み、産後3ヶ月は家にこもりきりでした。「保育士だから子育てには慣れていると思われるけど、仕事で赤ちゃんを担当したことはなく、右も左もわかりませんでした」と当時を振り返ります。そんな木場さんが子育て支援センターを初めて訪れたのは産後7ヶ月のとき。スタッフに話を聞いてもらって心が楽になって以来、頻りに利用するようになりました。やがて「保育士の資格があるなら」とスタッフに誘われ、働き始めたのです。「子どもが3歳になるまでは働く気はなかったのですが、子連れ出勤も可能だったのでぜひ力になりたいと思いました」と木場さんは話します。

利用者同士を繋ぐ
架け橋でありたい。

子ども相手の幼稚園教諭とは違い、今は利用者のサポートも大事な仕事。木場さんが注力しているのは“孤育て”にならないよう、利用者の心に寄り添うこと。「私は一人で抱え込んでいました。赤ちゃんも2人の時間が長かったから大人と話せるだけでうれしかったし、ここでいろんな人と出会って“孤育て”から脱せたんです」と木場

さんは言います。断乳や離乳食、トイレトレーニングなど、育児に悩みはつきもの。そうした相談に乗るだけではなく、利用者同士が話しやすい環境を作るのも木場さんの大切な役目です。また、子連れ勤務だからこそ、仕事中は我が子とは距離を置くようにしているそう。「赤ちゃんの頃からこういう環境だから子どもも理解しているようで、甘えることもなく勝手に遊んでいます」。さらに、支援センターを情報や知識を得る学びの場としても活用してほしいとの思いから、経験を生かしてベビーマッサージやわらべ歌を教えることもあります。「子連れじゃなくても利用してほしいので、妊婦さんや大人だけで来てもらえるのはうれしい」と話す通り、ここには様々な人が訪れます。中には遠くに引っ越した人が顔を見せることも。支援センターは子どもの遊び場という枠を超えて、利用者の心の拠り所にもなっているのでしょう。木場さんにとってもそれは同じ。利用者をサポートする一方で、同じ子を持つ母として利用者に助けられることも多いそう。木場さんは、いずれは保育士への復職を予定していますが「この職場が大好きだから、ずっとここにいたい」と笑います。「垂水は、子育てに最高の環境。ハード面の不安は、皆が繋がることで補えます。子どもが3人以上いる家庭も多いんですよ」と木場さん。“孤育て”に悩むママがいなくなることを願いながら、木場さんは持ち前の笑顔で今日も利用者同士を繋いでいます。

取材先

社会福祉法人垂水市社会福祉協議会
垂水市子育て支援センター
〒891-2105 垂水市南松原 38 TEL 0994-31-3052

